



健康社会学研究会

ニューズレター No. 67

発行：健康社会学研究会

事務局：〒170-8445 東京都豊島区東池袋 2-51-4 帝京平成大学 現代ライフ学部 人間文化学科（担当 森川洋）

FAX 03-5843-3297 E-mail : h.morikawa@thu.ac.jp

ニューズレター No. 67 / 2013 年 1 月 編集担当：池田康幸

新年のごあいさつ

新年あけましておめでとうございます。会員の皆さまには輝かしい新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年を振り返りますと、政治が停滞、経済も低迷、被災地復興も進まず、不安といら立ちが募る 1 年でした。これから上がるのか下がるのか、進むのか戻るのか、変わるのか変わらないのか、日本の危機とも言える国難をどう乗り越えていくか、今年は日本の真の力が試される一年になるといえます。

私たちは人口減少、高齢化、格差社会と今までに経験のない時代をこれから生きていきます。豊かさを「GDP」（国内総生産）で、健康を「寿命」という物差しでは、もはや測りつくせません。旧来の発想から、社会や地域、人々の生活の質という軸で豊かさや健康を再考していく必要があります。人々の健康と幸せを促進するものは何かという問いに、保健医療分野以外の心理学、経済学、社会学、政治学等での研究が進められています。

未来は発想の転換と多岐にわたる人々の研究・実践を求めているのです。

多くの人々が健康で幸せな生活を送れる社会を築くことは簡単なことではありませんが、我が研究会は多職種・多分野が集う強みを活かし、一石を投じる活動を目指していきたくと思います。

会員の皆様には、いろいろな形でつながりあい、高めあい、そして築きあう機会（チャンス）として、当会の事業への積極的な参加を心からお願いいたします。

私たちの未来を希望と夢の芽から育てていきましょう。共に一歩を踏み出しましょう。

健康社会学研究会 代表 松岡正純

第 48 回 健康社会学セミナーのご案内

延期しました第 48 回健康社会学セミナーを下記のとおり開催します。皆さまには大変ご迷惑をおかけいたしましたこと運営委員一同こころよりお詫び申し上げます。詳細につきましては、同封の開催チラシをご覧ください。

【テーマ】多様な機関の連携によるコミュニティ形成過程にせまる

【日時】平成 25 年 2 月 23 日（土） 13:30-17:00（受付 13:00）

※ セミナー終了後に懇親会を広尾駅周辺で開催します。

月例会報告

《7 月月例会》

日 時：平成 24 年 7 月 28 日（土）15:00-17:00（受付 14:30-）

場 所：日本子ども家庭総合研究所 会議室

報告者：林 二士 氏 NPO 法人 心身障害者生活支援センター ダンデライオン

（テーマ）子どもの健康とヘルスプロモーション～「遊び」「身体活動」を通して～

子どもの日常において「遊び」は重要であるということを基軸に、子どもの健康問題、遊びの変化、ライフスタイルの変化などを丁寧に報告された。遊びの定義は児童心理学、哲学、教育学の解釈により定義は異なるという。ここでは遊びの定義を次の 5 項目とし子どもの健康と遊びに関する研究の調査結果をもとに報告を行った。

- ① 遊びは自由で自発的な活動である
- ② 遊びは楽しさや緊張感を伴う活動である
- ③ 遊びは自己目的的な活動である
- ④ 遊びは総合的発育発達、人間形成を促す活動である
- ⑤ 遊びは健康をつくりだす活動である



子どもの健康をつくりだすものは何かという視点に立ち、子どもの生活をみると「遊び」は重要なキーワードである。遊びの持つ意味を再確認し、子どもが友人とともに身体を動かし楽しむことができる環境をより多く整えていくことが今後の課題として重要である。

報告者：池田康幸 氏 埼玉県三芳町

（テーマ）行政管理栄養士として 14 年間の保健センター業務からヘルスプロモーションを考える

コンテンツとして、住民組織支援と公共政策づくりを取り上げた。住民組織支援では当町における食を中心に活動したボランティア組織と運動を中心に活動したボランティア組織の活動を振り返った。運動を中心に活動したボランティア組織では住民組織活動の活動支援の示唆を得ることを目的に行った聞き取り調査の内容について報告した。

公共政策づくりでは食育推進計画の策定から現在の状況について報告した。食育計画は健康増進計画や次世代育成支援行動計画に比べ庁内においてさまざまな部署が多く関わり策定されるという特徴がある。すなわちこれの伴い実施される事業もさまざまな部署で行われる。この現状をもとに今後推進していくうえで効率的、効果的な事業の立案が必要である。

（運営委員 池田康幸）

《8 月月例会》

日 時：平成 24 年 8 月 25 日（土）15:00-17:00（受付 14:30-）

場 所：日本子ども家庭総合研究所 会議室

報告者：金子元彦 氏 東洋大学ライフデザイン学部准教授

（テーマ）障害児者におけるスポーツ活動の事例から、その現状を考える

障害児者における運動やスポーツを実践するためには、多様な人々の関わりが不可欠である。障害児者を対象とした宿泊型キャンププログラム（2泊3日）の事例から、障害児者を取り巻く社会の現状と課題について検討した。参加者は 15 組（8 歳～32 歳）で、重複障害が多く総じて重度である。プログラムはカヌーやバナナボート等のマリンスポーツと室内レクリエーションで、学生ボランティア 18 人がマンツーマンの態勢で

行った。

障害児者の保護者やボランティアスタッフが高齢化し、また活動を支えるメンバーの慢性的な量的不足がある中、キャンプを通じて笑顔、会話、自立など保護者の語りからは明るい兆しが伺えた。「できない」と思っていたことが意外に「できた」など、子どもに秘められた力や可能性を再認識する機会となった。

また、学生ボランティアの正直な感想は「とにかく大変だった」であったが、「不安」から「自信」への変化、保護者の接し方を客観的に観察する視点など、気づきも多かった。

このような活動の実現には、多様な人の組織が終結されることが不可欠であり、そのためのコーディネーターが必要である。継続的に実現していくためには課題も多い。



報告者：下山田鮎美 氏 東北福祉大学健康科学部講師

(テーマ) コミュニティ・エンパワメントにおける保健師の役割に関する基礎的研究

子育て中の母親たちの手でコミュニティにおける自身の「居場所」をうみだすということ



研究の背景としては、少子化社会到来への危機感の高まり、「すこやか親子21」をはじめとする少子化対策に関する施策は充実してきた。子育て中の親の支援とは、親の主体性を引き出し、励まし、見守り、育てる。サポートというよりは、エンパワーである。地域子育て支援拠点やそれに類する場を親子の「居場所」と捉え、子育て中の母親たちの手でコミュニティにおける自身の「居場所」を生き育てるということが、各々にとってどのような体験だったかを明らかにし、そのような母親たちの力が引き出

されるために、専門職（保健師）はどのような存在であったらよいかを検討した。

子育てサークル等の母親7名に対する半構成的インタビューによる質的記述的研究の結果、子育て中の母親たちの手でコミュニティにおける自身の「居場所」を生き育てるという体験として、以下7つのカテゴリーが抽出された。

- ⑥ 「子育てサークル」を同志とともに生き育てる
- ⑦ 「子育てサークル」の先を同志とともに思い描く
- ⑧ 「ひろば」を同志とともに生き育てる
- ⑨ 「子育てサークル」や「ひろば」を生き育てることの意味を実感する
- ⑩ 主催者との関わりから主宰者を手伝う意思がうまれる
- ⑪ ジレンマを持ちながらもつながっていけることを知る
- ⑫ メンバーを同志としたコミュニティの一員となる

このような構図の中、果たして専門職（保健師）はどのような関わりを持っていけばいいのか？実は保健師は（直接的には）何もしなくていいのでは、という意見も出された。保健師は存在そのものでエンパワメントできるものなのではないでしょうか！！

報告者：高澤みどり 氏 千葉県市原市

(テーマ) 健口体操を活用した住民との協働による歯科保健活動の取り組み

市原市では、平成20年度から「心も体もいきいき講座」を開催している。この講座は、市民の健康づくり計画「健康いちばら21」の5分野（栄養・食生活、身体活動・運動、休養・心の健康づくり、たばこ、歯

の健康)をカバーし、参加体験型の講座で、全12回コース(選択制)となっている。

歯の健康分野は、「お口の体操でスマイルアップ!エレガンスアップ!ーおいしく・楽しく・キレイを目指しましょう!ー」と題して健康運動指導士の原真奈美氏を講師に招き、同氏が振り付けを担当した千葉県オリジナルの健口体操「スマイルアップ!ちば体操」等を中心に実施した。講義後のグループワークの中で、準備運動として大きな声を出したことや非常に印象的な健口体操に対して、新鮮な驚きの声が上がった。もっとやりたい、継続してやりたい、夫に教えたい、孫と一緒にやりたいのもっと練習したい等、次の機会を望む感想が多く上がり、自主的な活動に対する参加者の意識が高まっていった。



初年度はボランティア活動を希望する17名が2日間の育成講座を受講し、「歯っぴい8020応援隊」を結成した。その後も継続して参加者を募り、現在は33名が登録して、出前講座を中心とした活動を展開している。

「健口体操」は、住民への直接的な健康教育の手段であるが、住民の自主活動を促す効用を持つことが示唆された。歯科保健の分野から、「健口体操」を用いた健康なまちづくりの発信ができるよう、積極的かつ継続的な活動の定着まで、今後も支援していきたい。

(運営委員 高澤みどり)

《9月月例会》

日時：平成24年9月29日(土)15:00-17:00(受付14:30-)

場所：日本子ども家庭総合研究所 会議室

報告者：黒岩直人 氏 特定非営利活動法人 自立支援ネットワーク 茨城障害者雇用支援センター
(テーマ) 障害者の職業的自立を支援するための評価尺度の考察

障害者の職業的自立支援、すなわち就労支援を行うセンターに勤務する黒岩氏は、主体性と社会性が障害者の就労に必要な要素であることから、「主体性及び社会性に関する項目」という評価尺度の開発を行った。これは社会心理学者マズローの欲求階層説に基づき、その欲求階層にしたがった段階的な支援の必要性から、以下の6領域26項目(各項目1~5点)を設定したものである。

生理的欲求としての「身辺自立」(排泄、身だしなみ、移動、作業準備性)

安全欲求としての「意志交換」(挨拶・返事、傾聴態度、報告・連絡・相談)

所属と愛情表現欲求としての「集団参加」(積極性、柔軟性、他者の受容)

同「自己統制」(自他の区別、注意力・集中力、謙虚さ、情緒安定性、責任感・決断力)

同「対人関係能力」(素直さ、適応性、ルールの遵守、行動抑制、協調姿勢、共感性)

尊敬欲求としての「認知能力」(障害の認知・受容、自己理解・認識、他者の理解、役割行動、問題処理能力)

また上記の尺度ではないが通常学級出身利用者と特別支援学級出身利用者を比較したところ、通常学級出身利用者に課題が多く見られており、適切な支援を受けられていない可能性が指摘された。



就労支援にはソーシャルサポートが重要であり、それは社会的存在である人としての普遍性につながる。障害者にとって就労とは「社会の中で自分の存在が認められること」であり、そこに障害者就労支援からの学びと健康社会学的視点がある。

(副代表 杉田秀二郎)

ホームページ・フェイスブックの紹介

健康社会学研究会ホームページ

<http://www.fureai.or.jp/~ribbon/healpro/>



健康社会学研究会フェイスブック

<https://www.facebook.com/healpro>



新出版企画

昨年はペースが遅くなってしまい御迷惑をおかけいたしました。今年は執筆希望者に具体的に原稿依頼できるよう進めています。依頼があった場合には、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

(副代表 杉田秀二郎)

事務局からの連絡

平成24年度会費納入のお願い

毎年会費の納入についてご協力頂きありがとうございます。今年度も同封の払込票、もしくは銀行振込にて平成24年度会費の納入をお願いいたします。

会費納入先

郵便振替の場合・・・同封の払込書をご利用ください。(00100-8-41025)

銀行振込の場合・・・下記いずれかの口座へお振込みください。

- ・みずほ銀行広尾支店 普通 1842122 健康社会学研究会 代表 松岡正純
- ・ゆうちょ銀行(金融機関コード:9900) 当座 〇一九店(ゼロイチキュー店:店番019)
0041025 ケンコウシャカイガクケンキュウカイ

※会費納入有無の確認は本封筒宛名タックラベルをご確認ください。

*平成24年度までの会費をこれからご納入の方へ

170-8445
東京都豊島区東池袋 2-51-4
帝京平成大学現代ライフ学部
森川 洋 様
平成24年度会費払込票在中

封筒の宛名ラベルには、「平成●年度払込票在中」と記載されています。

*平成24年度の会費をご納入済みの方へ

170-8445
東京都豊島区東池袋 2-51-4
帝京平成大学現代ライフ学部
森川 洋 様
平成24年度会費納入済み

宛名ラベルには、「平成24年度会費納入済み」と記載されています(払込票は同封いたしておりません)。